

# フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅲ

－ デュルケーム中期道德教育論：生理学的心理学と集合表象論 －

太 田 健 児\*

The different visages of the secular morality in education in the French Third Republic Ⅲ

－ E.Durkheim's moral education of his middle period : Psycho-physiology and collective representation －

Kenji Ota

E.Durkheim was elaborating “collective representation” and “Social Realism” which result from it, in his moral education of his middle period. *The Division of Labor, The Rules of Sociological Method, Suicide, Individual Representation and Collective representation*, that they were his works at this time, contributed many ideas to the field of Sociology. In these works, he defined the conception of “collective” essential for “Society” independent of God, and he rejected the materialism in Psycho-physiology, whereas he point out the all-importance of Spirituality in our recognition. On the analogy of the position of Spirituality in our mind, he illustrated the conception of “collective”, and applied it to “collective representation” and “Social Realism”.

However, he identified with the concepts of collective representation and Social Realism in an effort to leave the way open for future developments in moral science, so that “Social Realism” was attached by French Kantians, A.Foillée, S.Deploige, F.Rauh, and they much discussed its philosophic bases.

## Key Words

collective representation Social Realism Psycho-physiology materialism  
spirituality

## 問題の所在

ライシテという19世紀フランスの第三共和制期独自の歴史文脈の中で、どのような世俗的道德教育論（＝ライックな道德教育論、以後こちらの呼称を使用する）が輩出し、どのような類型化が可能なのか。本研究はこの観点から当時の道德教育論の分析を行っているが、およそ二つの系譜が存在する点を前回解明した。一つは一般教養的な教育論や教訓的な言説によって構成された道德論の系譜である。これは聖書自体を否定せず、聖書やカトリックも一つの歴史・文化・教養として位置づけているが、最後はカントの道德論を論拠とした、いわば折衷的な道德学説であった。これは当時の主流を占めていたであろうと推測され、いわば修養論あるいは人格論の類いであった。もう一つはデュルケームに代表される実証主義的なメタ倫理学の立場で且つ社会学との融合領域創出作業が伴うモラルサイエンスの系譜である。タブーは存在せず、

---

\* 総合人間科学部 人間心理学科

宗教教育、宗教そのものも俎上に乗せられ分析される。

そこで本研究は、モラルサイエンスの系譜としてデュルケーム前期の道德教育論を前回考察した継続として、今回デュルケーム中期の道德教育論を分析していく<sup>1)</sup>。

### 1) 前期道德教育論から中期道德教育論へ —前期道德教育論の特徴—

デュルケームのモラルサイエンスにとっての理論的課題はおよそ次の三つに集約されることが前回確認された。

- ①ライシテの歴史的根拠と宗教思想史におけるライシテの系譜学確立
- ②宗教と道德との分離＝神性概念の否定による「自前」の道德確立
- ③ライックな道德の定式化・体系化

これらの理論的課題遂行は全く新しい道德教育論の開始を意味し、従来とは全く違った次元からの斬新な道德研究を意味し、当時の最先端のモラルサイエンスの胎動だったのである。

①に関してデュルケームは膨大なボリュームの『フランス教育思想史』全編に亘ってライシテの歴史的根拠と宗教思想史におけるライシテの系譜学とを展開している。

②に関しては前回解明されたとおり、ライックな道德にとって、「神」という超越性に依拠しないで、世俗の人間が世俗の原理でもって道德の基礎づけすることをデュルケームは前期から行っていたわけである。それは「神」の超越性が出所でない代わり、個人単位の人間が出所でもなく、その中間世界としての「社会」概念の提示であった。

注目されるべきはこのような「社会」概念提示のためデュルケームは前期道德教育論において二つの作業を行った。一つは義務という「形相」の確認である。形相とは元来アリストテレスの用語であるが、フランス思想史ではカントの「形式」概念と混同され、結局はプラトンの「イデア」概念とほぼ同じ意味で使用されている。よってデュルケームのいう義務という形相とは、この②「宗教と道德との分離＝神性概念の否定」の結果として陥る可能性がある相対主義への歯止めの意味合いがあった。しかしその義務の具体的内実を示しているわけではなく、義務の内実に関しては歴史的・文化的には相対的な部分があり、道德の可変性をデュルケームは認めている。つまり道德の絶対性と相対性との両立が図られているのである。もう一つの作業は人間にとっての「社会的性向」の存在の証明とそれが他ならぬ当該社会によって育成されていくメカニズムの解明であった。つまり宗教的世界観では人間に超越（＝外在）する形で道德が存在しそれが啓示される、あるいは従来の哲学や倫理学のある系譜では所謂性善説的な道德観が説かれる、といういずれの道德学説にも与しない立場の表明であった。デュルケームにとって人間本性や善なるものの存否自体を問うことは不毛な作業なのである。ただ唯一「社会的性向」さえ漠然と曖昧な形であっても内在されてさえいればそれでよいのであって、後は当該社会がそれを育成していけばよいのである。

以上、相対主義の拒否と道德の可変性確保のための義務という形相の確認、社会的性向の確認という二つの準備作業を経て、社会概念が提示されるに至ったのである。

この社会概念こそ中期以降のデュルケーム道德教育論あるいは社会学における鍵概念である「社会実在論」や「集合表象論」の萌芽であり、ここに前期から中期にかけての一貫性が見えてくるのである。

③に関しては、①②の総まとめになるわけであるが、その理論構築の方法として、従来のオー

ソドックスな哲学・倫理学の議論が展開されていた点も確認された。これは執拗に繰り返された道徳的事実の認識方法の議論が何よりの証拠である。そこでは道徳的事実の認識論的誤謬のメカニズムとこの誤謬脱却の方法としての「観察」とが提示されたが、勝れて認識論の議論そのものであり、実証主義社会学の大成者であるデュルケームの基礎にあったのは従来の哲学・倫理学であって、社会学というよりはむしろ社会思想に近い点も確認された<sup>2)</sup>。

それゆえ本稿はこの③を踏まえつつ②の社会概念の理論構造を以下分析していくこととなる。

## 2) 中期道德教育論の特徴 —社会概念の理論構造—

デュルケームの中期のテキストを処理する上での問題は、いずれの著作も社会学分野での大作である点である。社会学分野でのキーワードを十分理解しながらも、その奥に埋もれている哲学上の論拠を洗い出していかなければならない。本稿では「個人表象と集合表象」(1898)<sup>3)</sup>を中心に『社会分業論』(1893)<sup>4)</sup>『社会学的方法の基準』(1895)<sup>5)</sup>『自殺論』(1897)<sup>6)</sup>の4つをとり上げ、それらにおける集合表象論と社会实在論との絡み、そして集合表象との相関における個人表象における個の概念にも着目していく。

### 2)-(1) 生理学的心理学におけるマテリアリズム（物質還元主義）に対する批判

さて、集合表象と個人表象とに焦点を当てるためには、中期主要著作の後に執筆され、集合表象の定式が原形で示されている論文「個人表象と集合表象」の分析が妥当である。この論文では、生理学的心理学 (psycho-physiologie) 批判の形をとった初歩的な哲学の議論が展開されているが、その内容はマテリアリズム (matérialisme) と唯心論 (spiritualisme) との問題である。この論文の前半では感覚・イマージュ・観念などを全て脳細胞・神経組織という物質に還元し説明する生理学的心理学が批判される<sup>7)</sup>。この生理学的心理学のように形に現れないものを何でも物質に還元してしまう発想をデュルケームがマテリアリズム (=物質還元主義) とみなしていることは、この論文の中盤で明らかになる。そこでは、従来の社会思想が「個人主義的社会学」(la sociologie individualiste) と命名され、これらの原理が「古い唯物論的形而上学」(la vieille métaphysique matérialiste) の原理に例えられている。その理由として、個人主義的社会学が、複合体を単純によって、高級体を劣等体によって、全体を部分によって説明している点が挙げられている<sup>8)</sup>。もちろんこの箇所にくるまでにデュルケームは、全体は部分の総和より大きいこと、しかしその全体は部分を基体 (substrat) としているがゆえに相対的自律性しか有さないという所謂「特種的综合観」<sup>9)</sup>を生理学的心理学批判の形を借りて主張してきたのであるが、ここで「特種的综合観」の発想を含まない思考様式としてマテリアリズムが念頭におかれていたことが明言されたわけである。そして生理学的心理学による表象の説明に反対して、マテリアリズム批判とそれに対する唯心論的性格の優位を論拠としたデュルケーム独自の表象論が展開されていくのであるが、とりあえず生理学的心理学におけるマテリアリズム的傾向に対するデュルケームの批判をさらに詳細にみておこう。

デュルケームは、生理学的心理学の「記憶」や「連想」の扱いを批判する。

まず、記憶に関してである。生理学的心理学では、感覚、イマージュ、観念が人間の内部から消失した時、オブジェとしては何の痕跡も残さず消失するが、それらの生理的印象だけは完全には消失せず、神経要素にある変化を残し（神経要素がこの時と同じ振動を後でするようになる）、再びその神経組織が刺激されると、同じ振動が繰り返され、先と同じ心的状態が同一

条件で現れると説明する。この類いの学説としてレオン・デュモン説、「再生の条件は新しい刺激」というラヴィエ説、「覚えているという現象は絶対に心的秩序の事実ではなく、脳組織内部にある伝導路が現れることにより存在する純粹に一つの生理的現象、一つの生理形態上の状態」とするジェームス説をデュルケームは引用する<sup>10)</sup>。しかし、デュルケームはいずれにもマテリアリスムの傾向を嗅ぎとるのである。つまり記憶を全て脳細胞や神経組織という物質に還元し、生体組織の一特性とみなすのがマテリアリスムの特徴なのである。

この観点に反対してデュルケームは、物質には還元され得ない記憶活動として「心的現動」(la vie mentale) という観点を対置させる。生理学的心理学の発想では、人間の記憶の外部に何も存在しなくなるというのがデュルケームの論旨である。それゆえ、知的活動は、物質的な基体から離れて、相対的に独立的な存在である必要があるとされる<sup>11)</sup>。

次にデュルケームは、記憶と結びついた現象として連想や類似もとりあげる。

連想に関するの心理学の法則として「神経の伝導が一度通ったことのある伝導路を通過する時には、さらに容易に伝導されるという全く生理的な事情が精神に反映したものに過ぎない」というジェームス説、「神経振動がAからBへ伝わった」というラヴィエ説がここでは引用される<sup>12)</sup>。さらに類似問題は、二つの状態の類似の原因が、二つの状態が一部共通のものをもっており、この説明がまた神経系統の伝達や細胞群の連鎖反応でもってその全てが説明されている点がりあげられている<sup>13)</sup>。

しかし連想や類似に関する理論は、結局二つの表象部分に対応する二つの細胞群を必要とし、表象や観念を構成している各部分にそれぞれ対応する神経諸要素を一つ一つ想定せざるを得ないとして拒否されるのである。例えば色を表象するにしても、何十ものグラデーションがあるわけで、それらに対応する何十もの脳細胞が必要になってくるという極例でもってデュルケームはこれを断罪する<sup>14)</sup>。このような生理学的心理学の発想を、デュルケームは、脳という場所での心的現動の「空間的一致」、あるいは表象などが脳のどこかに分布している「脳の地理学」という呼称で、そのマテリアリスムの論拠を擲論している<sup>15)</sup>。そして、表象が何かアトムのような要素で形成されているのではないこと、人間の心的現動はその時の事情に応じて部品の断片を借りてできた寄木細工ではないこと、個々の細胞は観念を発生させる力がなく、観念は各細胞をはみ出してしまっていることが述べられる<sup>16)</sup>。ちなみにデュルケームは、そのような脳細胞という物質に全て還元するマテリアリスムを「知能ニヒリズム」(nihilisme intellectuel) とも擲論している<sup>17)</sup>。

## 2)-(2) 生理学的心理学に抗するスピリチュアリティ論 —社会实在論への布石—

それゆえ、デュルケームは、脳細胞という物質に還元され得ない部分として「スピリチュアリティ」(spiritualité) の存在を主張する<sup>18)</sup>。これは先の「心的現動」と同義であるが、ここから、ブーグレ (Célestin Bouglé 1870 - 1940) がデュルケーム学派の社会学主義を、「スピリチュアルな傾向を新しい様式で樹立し、妥当化する努力」<sup>19)</sup> と評した理由が初めて分かる。

では、デュルケームは表象をどう定義づけるのか。表象の「外在性」、つまり表象は表象として存続することをデュルケームは主張する。表象が一度存在してしまえば、いつまでも神経中枢に従属しないで存続するという理由で、表象は实在とされ、その基体から独立しているものとされる。但し、その表象の外在性は、脳神経の働きや脳細胞と断絶した外在性ではなく、それらとつながりをもった相対的で部分的な自律性を有する外在性なので、後者の基体の特徴も

同時に残存する<sup>20)</sup>。「全体の内部に起こる現象は、全体に特有の性質によって、複合体は複合体によって、生の事実や心的事実はそれを発生させた独自の結合によって説明する以外にない。科学が辿り得る進路はこれだけである」<sup>21)</sup>と主張されるが、ここで本稿が先に指摘した特種的综合観の応用がすでに展開されていたことがみてとれる。

このような反マテリアリズムとしてのスピリチュアリティの優位という特種的综合観が、ついに個人と個人相互の結合からなる社会とに適用され社会実在論が根拠づけられる。デュルケームは『社会学的方法の規準』[以下『規準』と略記]での社会実在論の定式をこの論文の中でも再定義し弁護するのである。「我々が『社会学的方法の規準』で、社会的事実はある意味で個人に対して独立的であり、個人意識に外在的であるとしたのは、我々が心的世界について今説明したことを社会的領域においても肯定しようとしただけのことである。社会は結合した個人の総体をその基体として有している」<sup>22)</sup>。「神経要素間で行われる作用・反作用の所産である個人表象が、これらの要素に内在的ではないということに不思議がなければ、社会を構成する原初的意識間で交換される作用・反作用の所産である集合表象も、これらの意識に内在的ではなく、はみ出している」<sup>23)</sup>。「集合表象が個人に外在的であるのは、集合表象が個体別の個人から発生するのではなく、これら個人の協同から発生するからである。個人的感情は、結合が発達させる独自の力で相互結合しなければ、社会的なものとはなり得ない」<sup>24)</sup>。

このように生理学的心理学のマテリアリズム性に対する批判と精神の外在性という特種的综合観が今度は個人と社会とに適用されたわけである。

『規準』での社会実在論の定義を再度確認すると、「社会的諸事実をももの(choses)のように考察することである」<sup>25)</sup>、「社会諸現象は、それらを表象する意識の主体から切り離して、それ自体において考察されなければならない」<sup>26)</sup>というものである。つまり、この『規準』でいわれる「もの」(choses)は、「個体」単位の特性から類推されてはならず、自然科学の観察対象と同様に、その外在する姿どおりありのままに観察されるべきことが説かれている。「個人表象と集合表象」の中の一節である「全体集合が思惟し、感じ、意欲する。この理由から社会現象は、個人の個人的な性質には依存しない」<sup>27)</sup>という定式は、これと全く同義であろう。

以上から表象問題と社会実在論とが特種的综合観による基礎づけをもって定位されたことが再確認できる。

### 3) 中期主要著作における「集合表象」の扱い

さて上記の図式が『自殺論』『社会分業論』といった勝れて社会学分野の著作とされる大作においてどのように展開されていたのであろうか。これはデュルケームの実証主義的社会学が実はその根底には哲学分野の認識論や存在論があったことの証明にもなってくるので次に考察する。

#### 3)-(1) 『自殺論』における集合表象の扱い

ここでは、自己本位的自殺、集団本位的自殺、アノミー的自殺の類型化の問題ではなく、それらの根本にあるデュルケームの特種的综合観が当然問題となる。

『自殺論』では集合表象が、集合的傾向(tendances collectives)、あるいは集合的状态(états collectifs)という表現で多く出てくるが、いずれにせよ特種的综合観とこれを論拠とする集合表象論や社会実在論が展開されていることに変わりはない。

デュルケームは次のようにいう。「筆者は社会現象の基体を個人の意識に求めることを拒否

したが、社会現象にはそれとは別の基体があることを認めている。それはあらゆる個人意識が互いに結合し、組み合わせられて形成される基体である。この基体のさらなる部分は個人的意識である、この個人的意識の要素も別にこれと違った仕方で行われているわけではなく、同じく部分から構成されている。実際今日自我というものが自我をもたない多くの意識から生まれること、その原初的な意識のそれぞれがまた意識のない生命単位の所産であること、そしてその生命単位自体も、同じく生命のない分子の結合に基づいていることは、すでに周知のことである。ゆえに生物学者や心理学者が正当にもその研究せんとする現象を、それがすぐ下位の諸要素の結合に根ざしているという理由だけで十分根拠があるとしている以上、社会学もこれと同じであってよいのではなからうか<sup>28)</sup>。

この後デュルケームは、「個々人が結合して作りあげた集団は、個々人とは異なった別種の実在である」ことと、「集合の状態は、個人たる限りでの個人に影響を与えるに先立って、また個人の中に新たな形で純粹に内的な存在として形成されるのに先立って、まずそれを生んだ集団の中に存在している」ことの二つを定式化する<sup>29)</sup>。

またこの『自殺論』でも『規準』での社会実在論の定義が再確認されている。

「この力の実在性を承認し、我々に作用を及ぼしている物理・化学的力と同じように、外部から我々に行動を促している力の全体としてこれを理解することである。それはまさに一種独特のものであって、言葉上の実在ではない。ちょうど電流や光源の強さを測定するように、それらを測定することもできれば、相互の大きさを比較することもできる。したがって社会的事実の客観的なものである、というこの基本的命題、筆者が他の著作の中で証明し、社会学的方法の原理とみなしているこの命題は、道徳統計、わけても自殺統計の中に、新たな、特に論証性に富んだ証拠を得たことになる<sup>30)</sup>。

このように社会的状態が個人的状態と異なり、さらに社会的状態が個人に外在する「特種的綜合観」が『自殺論』でも展開されていたことがこれで分かる。しかし、『自殺論』では個人に対する社会の外在性に関して、まさにその「外部性」とは何かという問いの構造がある点、さらに外在性が外在するだけでなく、個人に対して作用力・影響力がある点が主張される点、個と全体との相関に言及されている点、以上三点に着目されるべきであろう。

第一点目の「外部性」についてである。「(第3編)社会現象一般としての自殺について(第1章)自殺の社会的要素」において、デュルケームは自殺を規定している個人的条件を二種類挙げる。一つは個人の外的状況ともう一つは本人の内在的な性質、即ち本人の生物学的構造及びその基礎をなす物理的な付随現象であるが、ここで注意すべきは、デュルケームが「外的状況」という用語を、本人の内在的な性質・生物学的構造に対置させて使用している点である。その例として、不幸、家庭の悩み(不幸な結婚)・破産・希望の挫折・貧困・自尊心の棄損・道徳的あやまちに対する自責の念といったものが挙げられているが、これらは、いつ・どこでも・誰にでもある「外的状況」という意味では、個人に外在するものと理解されやすいが、デュルケームはこのような「外的状況」を個人の事情という意味で使用している。そして、同じ不幸な状態にあっても、自殺する人とならない人がいるので、これは自殺の決定要因ではないと主張されるに至るのである<sup>31)</sup>。

しかし個人と社会という二元論的図式からすると勝れて後者に属するかのような「外的状況」は、デュルケームにあってはむしろ「個人」側に属するものとして処理されている点はやはり特異である。これはデュルケームが集合表象あるいは社会を第3類型として考えている可

能性を示すものである。

第二点目の外在性のもつ個人に対しての作用力・影響力についてである。

デュルケームは、集合的傾向を宇宙的な諸力に類比し、現に実在する固有の力であるとし、その集合的傾向の実在性が宇宙的な力の実在性にも劣らないとし、集合的傾向も思惟も、個人的な傾向や思惟とは性質が違い、前者は後者のもっていない様々な特徴を備えている点を改めて強調する。その特徴とは、それらが個人の力で左右できない点、個人がそれらをそうたやすく自分の状況に適合させることができない点、個人に対して大体等しい影響を及ぼすためにある程度類似した特徴を個人に刻印する点である<sup>32)</sup>。

こうしてデュルケームは、自殺の原因を社会的環境の中に求め、個々人を同一方向に向かわせる何らかの力がそこにあるとし、その影響を被る者の誰・彼に関わりなく等しい強度で作用し続けるものとする<sup>33)</sup>。

第三点目の個と全体との相関についてであるが、これは、個人という基体の結合から外在的な集合的傾向が生じるプロセスに言及される形で述べられているのが特徴である。

例えば、社会の中には個人の力以外は存在せず、社会的事実を生じさせる基本的特性は個々人の精神の中に胚胎しているが、それが個々人の結合の中で変容を受ける時、初めてそこから社会的事実が生じると定義されるのである<sup>34)</sup>。

以上のように、個人に対する社会の外在性、その個人に対しての作用力・影響力、個と全体との相関が定式化されたことは、同時に特種的综合観とこれを論拠とする社会実在論の定式が再確認されたことでもあるが、この定式が宗教論へ転用されるのは当然である。

つまり、神に対する畏敬の念を個人に強いる力は実は社会だったのであり、崇拜の対象となるのはそのような力に対してであって、その力の源泉は結局社会なのである。そもそも神とは、社会の実体化された形態に他ならないとデュルケームは断言する<sup>35)</sup>。したがってそこには、諸個人の意識の結合なくしては生まれてこない精神的状態の上にさらに何かが付加された別の基体としての精神的状態の巨大な総体が存在すると結論されている<sup>36)</sup>。

また宗教と同様に道德に関しても当然言及される。道德は経験的世界のいかなる所与にも由来しないのか、それとも社会に由来するのか。もしそれが個人の中に存在しないとすれば、当然集団の意識の中に存在すると説明されるのである<sup>37)</sup>。

以上が『自殺論』における集合的傾向あるいは集合的状态と社会実在論とそれらを基礎づける特種的综合観であり、社会の外在性の性質の詳細化、社会の個人に対する作用力・影響力、個と全体との相関、この定式の宗教及び道德への適用である。

次に中期主要著作では一番早く執筆された『社会分業論』をみてみよう。

### 3)-(2) 『社会分業論』における集合表象の扱い

『社会分業論』においても当然、集合表象論とその論拠である特種的综合観が説かれているが、個に外在する集合意識の衰退化・変容・再形成の過程が社会分業あるいは宗教史、歴史を例証として論じられている点の特徴である。

まず、特種的综合観が端的に示されている箇所の一つとして、功利主義者の社会概念に対する批判箇所が挙げられよう。デュルケームは、功利主義者が、社会の発生に関して、初めに孤立し独立した諸個人があって、これらの諸個人が次に協同するために社会関係が形成されると

いう順序を誤謬とする。全くゼロの状態から諸個人が結合することは「無からの創造」に等しく、自律的個性から個人的なもの以外には何ものも出現せず、最初にすでに集合的状态である協同そのものが存在しているとされる<sup>38)</sup>。「集合生活は、個人生活から生まれるのではなく、逆に、個人生活こそは集合生活から生まれるのである。社会的諸単位の独自の個性が、社会を分解しないでもいかに形成され成長できたかが説明されるのは、この条件においてのみである。この個性は、先在する社会的環境の内部において研磨されるので、必然的にそれは、この社会的環境の刻印をもっている」<sup>39)</sup>。

こうした定義は、「個人表象と集合表象」『自殺論』でみてきた特種的综合観の定式が全くこの時点で展開されていたことを示している。

さらに形成過程の側面に目を移すと、「分業の進歩」が証拠とされ、社会的圧力のかかり方という点が述べられる。例えば、周知の例であるが、我々を個別的人格となる方向に押しやる力（個人的性向に従う傾向に向かわせること）と、逆に全ての者たちを類似させる力（集合的類型から逸脱することを抑制したり妨げること）との例である<sup>40)</sup>。

しかし『社会分業論』の特徴は、集合表象の衰退のしくみが述べられている点である。例えば、地方的世論の圧力の減少とそれに伴う社会の一般的世論の形成についてである。後者は全市民の行為を身近に監視できず、この点で地方的世論に代替できないので、集合的監視は復元できないほど弛緩し、同時に共通意識は権威を失い、個人的多様化が増加するとデュルケームはいう。デュルケームは、社会的統制が厳重で、共通意識が維持されるには、社会が個人を完全に包み込むほどの小さな区画区分が必要であり、逆にこれらの区分が消滅するに従って、社会的統制も共通意識も衰退すると考えている<sup>41)</sup>。

文明の場合も同じメカニズムで説明される。文明がより広大な活動舞台に展開する時、文明がより多数の人々や事物に適用される時に、一般的観念が必然的に出現し支配的になるとされ、例として、法律、道徳、宗教分野で、ローマ人という概念に代わり「人間」という概念が出現することが挙げられている<sup>42)</sup>。

以上は、世論や文明を例にとった集合表象の衰退過程の説明であるが、これは同時に新しい大きな単位の集合表象の形成過程である点が重要であろう。共通意識の一般化に伴う個人的多様性の自由、部族の掟から抽象的規則への変化とその拘束力の減退、環節的類型の消滅に伴う伝統的権威の失墜、社会の拡大・集中に伴う社会の個人への拘束の減少など、いずれも小さい単位での集合意識は、分業が発達するにつれて次第に弱くなり曖昧となっていくことの必然性が証明されている<sup>43)</sup>。

但し、デュルケームが、分業に基づく集合表象の衰退と形成のしくみを、論理学の「具体性の捨象による抽象化」の公式で考えている点は再確認されるべきである。

例えばデュルケームは、小社会を、全員が同一の生存条件で生活し、集合的印象も一定しているので、共通意識は一定の特性をもつとみなす。しかしこの共通意識は、その小社会がその容量を増すにつれてその性質が変化するという。社会はより広大な地表の上に広がるのであるから、共通意識そのものも一切の地方的多様性を超えて高まり、よりいっそう空間を支配するのでより抽象的になるとされる。その時共通なものはもはやこれこれの動物ではなくて、これこれの種族であり、これこれの水源ではなく水源一般であり、某森林ではなく「抽象的」森林であると説明される<sup>44)</sup>。デュルケームは集合的合成力という用語も使用し、一つの合成的な像をつくるのに役立った個人的諸像が相互に差異があればあるほど、この合成された像はぼん



やりしたもので不明確であるとする。ローカルな集合意識が一般的集合意識に融合することでその個性が消えてゆくとされる<sup>45)</sup>。

以上、『規準』に垣間見られる特種的综合観と『自殺論』『社会分業論』における特種的综合観に基礎づけされた集合表象の定式とその社会实在論への応用である。

### 3)-(3) 集合表象論及び社会实在論の問題点

しかし集合表象論あるいは社会实在論に対しては当初から批判が噴出していたのも事実である。時代的にデュルケームに近接する後続の社会学者たち、例えばキュヴィリエ (Armand Cu villier 1887 - 1973) は、デュルケームが集合表象に固執した点に着目し、その原因を、ルヌヴィエ哲学の影響とデュルケーム自身に残る形而上学的残滓とにみている<sup>46)</sup>。G. ギュルヴィッチ (Georges Gurvitch 1894 - 1965) は、視界の相互性という自らの見地から、デュルケームの集合表象を評して、個人に超越する閉ざされた集合意識の設定、理性・ロゴス・精神という形而上学的思弁との同一視、集合的心理状況と集合的心理現動との区別への無知、集合的心理機制の発現を規則・予知可能態・客観化されたものにすり替えた点を批判している<sup>47)</sup>。

こうなった原因の一端は、デュルケームがあまりにも唐突に何の前置きもなく集合表象論あるいは社会实在論を切り出す手口にもあり、個人表象や個の概念の存立が全く不可能な理論に思われても仕方がない側面がある。事実、社会实在論争がガブリエル・タルド (Gabrielle Terde 1843 - 1904) との論争で終結せず、アルフレッド・ファイエ (Alfred Fouillée 1838 - 1912) らの新カント学派の哲学者たちとさらに激しく論争する結果になってしまった。デュルケーム研究者 S. ルークスは社会实在論争の原因の一つとしてデュルケームが「自説を極論として辛辣且つドグマティックに表明した」点を指摘している<sup>48)</sup>。S. ルークスはそれがどこかを示してはいないが、そう判断されてしまう箇所を指摘することは容易である。例えば「個人表象と集合表象」において、デュルケームは、社会的事実が個人に対してもつ相対的独立性・外在性を論証する際、全ての社会現象が例外なく外部から個人に強制される (宗教上の信仰や儀式、道德の規定、無数の法則) という性質を証拠とする。強制的なこれらの行為様式・思惟様式だからこそ、それらは個人の所産ではなく、個人を超越した道德力から発しているというのである<sup>49)</sup>。しかし、これは社会現象が個人に外在すること自体と強制という外在性の一特性とのすり替えである。しかも強制が外在性の一特性であるか否かという議論が全くない。外在する限りは個人に影響・作用を及ぼすことも確認されているが、各集合表象の外在性と、それらの妥当性とは別問題であろう<sup>50)</sup>。これを一足飛びに強制という結果から社会实在論や集合表象論の発生原因や存在証明を説明するのは本末転倒である。これは先の G. ギュルヴィッチによる批判点と全く符合する。また後年ついに教育学分野からアンリ・ブシェ (Henri Bouchet) などによって全体主義 (totalitarisme) として非難されるに至るが<sup>51)</sup>、責任の一端はデュルケームにもある。

### 結論

中期デュルケーム道德教育論の特徴は、社会概念の理論構築であり、そのための集合表象論・社会实在論の展開であった。その際、生理学的心理学への言及があり、そのマテリアリズムが批判され、逆にスピリチュアリティが擁護されていた。そしてこれら一連の議論の中核にあった論拠は「特種的综合観」であると本稿は結論づける。この特種的综合観があらゆる着想に敷

衍されており、その典型が集合表象論であり、社会实在論であった。但しこの特種的綜合観の宿命として、部分部分、個の側面がどうしても後退してしまい、この点が当初から非難を浴びており、その後社会实在論争に発展し社会学史あるいは思想史を形成していく。同時にこの論争によってデュルケームがその理論武装のためますますデュルケームらしくなっていくのである。

だが、デュルケームには個の概念がなかったわけではない。この点に関する研究は未だ皆無である。例えば最も個の概念の片鱗が示されているのは『自殺論』における、一人の人間内の道徳的感情における世論と個人との二層構造を説明する箇所だと思われる。個人表象と集合表象との並存状態、前者から後者への変化のしくみが記述された数少ない箇所なのである。少なくともデュルケームは集合表象と個人表象という二層構造を一人の人間の中にみており、その間を彷徨している状態を捉えようとしている<sup>52)</sup>。

また『規準』における「もの」と「観念」との議論箇所即ち「社会的事実をもののように観察する」という定式も実は個の概念を示しているのである。デュルケームの社会实在論を指して、中世スコラ哲学の普遍論争に似せて、実念論 (réalisme) 的傾向が指摘される場合がよくあるが<sup>53)</sup>、認識論的議論においては、全く逆の唯名論 (nominalisme) 的傾向が指摘できる。観察の対象は観念ではなくもの (chose) であるといった場合、スコラ哲学の「言葉からの議論」(argumentum ex verbo) に対決した科学の「もの(個物)からの議論」(argumentum ex re) にうまく対応するのである。それゆえ当時あれほど物議をかもした「社会的事実をもののように観察する」という定式も、argumentum ex re の res (もの/こと) から chose が導出されたとすれば、それほど奇異なことではなく、この次元ではデュルケームは実念論ではなく唯名論の立場であり、個の把握に努めていたといえる。

さらに本稿3)-(1)で言及したように、集合表象あるいは社会という概念が、個人とその外界という二元論的図式の後者に位置づけられているわけではない点も注意を要する。デュルケームにおいては「外的状況」と「社会や集合表象」とは区別されていたのであった。『自殺論』では個人に外在するかのような「外的状況」は、個人特有の事情の範疇で処理されており、「社会や集合表象」は外的状況以外の第3類型として、つまり新しいカテゴリーであった可能性が強いのである。

以上の点からデュルケームに個の概念の片鱗は垣間見ることはできるが、やはり曖昧であることは否めない。本稿は今回、社会概念の理論構造把握のため集合表象と社会实在論を集中的に取り上げたわけだが、中期デュルケームの著作群には彼の道徳学説を支える他の諸々の着想がまだまだ多く宝蔵されている。それゆえ先の個の概念問題とそれをめぐる社会实在論争などの分析を含めて次回の問題設定としたい。

## 註

1) 当該研究は以下の原著論文からの継続研究である。

①拙稿「フランス第三共和制期世俗的道徳教育論の諸相Ⅱ－モラルサイエンス前史とデュルケーム前期道徳教育論－」『尚綱学院大学紀要第56集』、2008年、135－147頁。

②拙稿「フランス第三共和制期世俗的道徳教育論の諸相－反教権主義的道徳教育論：視学官F.ペコによる自育論 (éducation de soi-même) 導入の周辺－」『東京大学大学院教育学研究紀要 第25号』1999年、79－87頁。

2) 同上。

- cf) 太田健児「フランス第三共和制期におけるライシテ問題とデュルケームライクな道德としてのモラルサイエンス構想」『日仏社会学草書 第一巻 デュルケーム社会学への挑戦』恒星社厚生閣、2005年、全230頁、173 - 201頁所収。
- 3) E.Durkheim, *Représentations individuelles et représentations collectives*, dans *Sociologie et philosophie*, 1924, PUF, (Ed.1996), pp.1 - 48.
  - 4) E.Durkheim, *De la division du travail social*, PUF, 1893 (Ed.1994), 416p.  
邦訳は、寿里訳、田原訳、井伊訳をそれぞれを参照し、さらに一部改訳し引用。
  - 5) E.Durkheim, *Les règles de la méthode sociologie*, 1895, PUF (Ed.1993), 149p.  
デュルケーム (著) 宮島喬 (訳)『社会学的方法の規準』岩波書店、1990年 (第11版)、全310頁。
  - 6) E.Durkheim, *La suicide*, 1897, PUF (Ed.1997), 461p.  
デュルケーム (著) 宮島喬 (訳)『自殺論』中央公論社、1997年 (第10版)、53 - 379頁。
  - 7) E.Durkheim, *Représentations individuelles et représentations collectives*, dans *Sociologie et philosophie*, 1924, PUF, (Ed.1996), pp.1 - 41.  
デュルケーム (著) 佐々木交賢 (訳)「個人表象と集合表象」『社会学と哲学』恒星社厚生閣、1985年、11 - 43頁。  
\*尚、本稿の引用箇所はこの邦訳も参照したが、本稿の論旨にそぐわない訳文・誤訳部分もあり大部分改訳している。
  - 8) E.Durkheim, *ibid.*, p.41.  
デュルケーム、同上、43頁。
  - 9) 特種の総合観という用語をインテンシブに使用したのは廣松渉である。  
廣松渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房、1972年 (1983年)、249 - 279頁。
  - 10) E.Durkheim, *ibid.*, pp.6 - 7.  
デュルケーム、同上、15 - 16頁。
  - 11) E.Durkheim, *ibid.*, pp.12 - 13.  
デュルケーム、同上、20 - 21頁。
  - 12) E.Durkheim, *ibid.*, p.10.  
デュルケーム、同上、18頁。
  - 13) E.Durkheim, *ibid.*, pp.14 - 17.  
デュルケーム、同上、21 - 24頁。
  - 14) E.Durkheim, *ibid.*, pp.14 - 17.  
デュルケーム、同上、21 - 24頁。
  - 15) E.Durkheim, *ibid.*, p.17.  
デュルケーム、同上、25頁。
  - 16) E.Durkheim, *ibid.*, p.38.  
デュルケーム、同上、41頁。
  - 17) E.Durkheim, *ibid.*, p.13.  
デュルケーム、同上、21頁。
  - 18) E.Durkheim, *ibid.*, p.39.  
デュルケーム、同上、42頁。
  - 19) C.Bouglé, "PRÉFACE", dans *Sociologie et philosophie*, PUF, 1924 (1996), p.LXXI.  
デュルケーム、同上、9頁。  
但し、デュルケームはスピリチュアリズムの系譜ではないことはその論旨を辿れば明らかである。
  - 20) E.Durkheim, *ibid.*, p.42.  
デュルケーム、同上、45頁。
  - 21) E.Durkheim, *ibid.*, pp.41 - 42.  
デュルケーム、同上、44頁。
  - 22) E.Durkheim, *ibid.*, p.34.  
デュルケーム、同上、38頁。
  - 23) E.Durkheim, *ibid.*, p.34.  
デュルケーム、同上、38頁。
  - 24) E.Durkheim, *ibid.*, p.36.  
デュルケーム、同上、39頁。

- 25) E.Durkheim, *Les règles de la méthode sociologie*, 1895, PUF (Ed.1993), p.15.  
デュルケーム (著) 宮島喬 (訳) 『社会学的方法の規準』岩波書店、1990年 (第11版)、71頁。
- 26) E.Durkheim, *ibid.*, p.28.  
デュルケーム、同上、91頁。
- 27) E.Durkheim, *op. cit.*, p.36.  
デュルケーム、前掲書、40頁。
- 28) E.Durkheim, *La suicide*, 1897, PUF (Ed.1997), p.361.  
デュルケーム (著) 宮島喬 (訳) 『自殺論』中央公論社、1997年 (第10版)、403頁。
- 29) E.Durkheim, *ibid.*, pp.361 - 362.  
デュルケーム、同上、403 - 404頁。
- 30) E.Durkheim, *ibid.*, p.349.  
デュルケーム、同上、389頁。
- 31) E.Durkheim, *ibid.*, pp.333 - 334.  
デュルケーム、同上、373 - 374頁。
- 32) E.Durkheim, *ibid.*, p.339, p.348, p.355.  
デュルケーム、同上、379頁、388頁、396頁。
- 33) E.Durkheim, *ibid.*, p.346.  
デュルケーム、同上、386頁。
- 34) E.Durkheim, *ibid.*, p.350.  
デュルケーム、同上、390頁。
- 35) E.Durkheim, *ibid.*, pp.352 - 353.  
デュルケーム、同上、393頁。
- 36) E.Durkheim, *ibid.*, pp.352 - 353.  
デュルケーム、同上、393頁。
- 37) E.Durkheim, *ibid.*, pp.359 - 360.  
デュルケーム、同上、400 - 401頁。
- 38) E.Durkheim, *De la division du travail social*, PUF, 1893 (Ed.1994), p.263.  
邦訳は、寿里訳、田原訳、井伊訳をそれぞれを参照し、さらに一部改訳し引用。
- 39) E.Durkheim, *ibid.*, p.264.
- 40) E.Durkheim, *ibid.*, p.268.
- 41) E.Durkheim, *ibid.*, pp.286 - 287.
- 42) E.Durkheim, *ibid.*, p.275.
- 43) E.Durkheim, *ibid.*, pp.265 - 290.
- 44) E.Durkheim, *ibid.*, p.272.
- 45) E.Durkheim, *ibid.*, p.273.  
『自殺論』では、ケトレの平均タイプと集会的傾向とが峻別されているが、この段階では、抽象化されたものと平均タイプとの区別は判然としない。
- 46) A. キュヴィリエ (著) 清水義弘 (訳) 『社会学入門』岩波書店、1953年 [邦訳初版]、52 - 53頁。
- 47) G. ギュルヴィッチ (著) 寿里茂 (訳) 『社会学の現代的課題』青木書店、1970年 (1988年)、94 - 124頁。
- 48) Steven Lukes, *Emile Durkheim, His life and work*, Stanford Uuniversity Press, pp.497 - 499.
- 49) E.Durkheim, *op. cit.*, pp.34 - 35.  
デュルケーム、前掲書、38 - 39頁。
- 50) デュルケームのこのような傾向を指摘するものとして以下の研究書が挙げられよう。  
cf) Albert Bayet, *La science des faits moraux*, Félix Alcan, 1925, pp.3 - 4.  
アルベール・バイエ (著) 久保田勉 (訳) 『道徳の社会学』名古屋大学出版会、1987年、9頁。  
石川晃司『保守主義の理路』木鐸社、1996、255 - 297頁。
- 51) Henri Bouchet, *L'individualisation de l'enseignement*, PUF, 1935 (1948), pp.52 - 57.
- 52) E.Durkheim, *op. cit.*, p.357.  
デュルケーム、前掲書、398頁。
- 53) マーティン・ジェイ (著) 木田元、村岡晋一 (訳) 『アドルノ』岩波書店、1992年、156 - 161頁。  
アドルノ自身のデュルケーム分析は次の課題とするが、ジェイの指摘どおりだとすると、アドルノのデュルケーム解釈は本稿とは正反対の解釈になる。